

に持て篠原に入て、薄茅を刈て行道を分る、篠竹都て五六尺ばかり生茂りて、中に嶮路所々にありて、漸く手を引れて歩み行。

〔伊勢物語上〕むかし男有けり、その男身をえうなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に、すむべき國もとめにとて行けり、○中ゆきくてするがの國にいたりぬ、うつの山にいたりて、

わがいらんとする道は、いとくらふほそきに、つたかえではまげり、物心ほそくすゝるなるめをみる事と思ふに、す行者あひたり、かゝる道は、いかでかいまするといふをみれば、見し人也けり、

京に其人の御許にとて、文かきてつく、
するがなるうつの山へのうつ、にも夢にも人にあはぬなりけり

〔和漢三才圖會七十一〕相坂山 在松本濱與關中間

有清水、名關清水又名關小川、自此東稱坂東、又名之關東、凡關東二十八州、關西三十八州、

〔古事記中〕爾自項髮中探出、設出弦一名云宇、更張追擊、故逃退逢坂、對立亦戰、爾追迫敗出、沙沙那

美悉斬其軍、

〔古事記傳三十一〕逢坂、名の由緣書紀に見えて、次に引り、孝德紀大化二年、詔に、凡畿内、東云々、南

云々、西云々、北、自近江、狹々波合坂山以來、為畿内國とありて、山城と近江の堺にて、近江に屬り、

今大津の西なり、万葉六五三丁に、大伴坂上郎女奉拜賀茂神社之時、便超相坂山、望見近江海云々、木

坂路是なり、綿疊、手向乃山乎、今日起而坂山なり、即逢十五丁に、吾妹兒爾、相坂山之皮為酢寸、十三丁に、相坂乎、

打出而見者、淡海之海、白木綿花爾、浪立渡、又未通女等爾、相坂山丹、手向草麻取置而、十五三丁に、

和伎毛故爾、安布左可山乎、故要氏伎氏、

〔萬葉集六〕夏四月、大伴坂上郎女、奉拜賀茂神社之時、使超相坂山、望見近江海、而晚頭還來作歌一

首、